

いのちを ささえる うたと ことば

第1部 講演「私を救った出逢い」
第2部 新垣勉ハートフルリサイタル

講師 **新垣 勉**

2015年4月19日(日) 那覇市民会館 大ホール

那覇市民会館は新垣勉さんが歌手として初のリサイタルを行った場所で、ちょうど35年後の今年、スミセイライフフォーラム「生きる」講演会をこのステージで行えることはご本人にとっても非常に感慨深いこと、とのお話に故郷のお客様から大きな拍手が起きました。

障がいや数々の逆境を乗り越えプロテノール歌手として大成された新垣さん。成長の糧となったのは盲学校の先生や先輩からのちょっとした励ましの言葉だったといいます。音楽の宿題が出来ずにしょげていた自分に音階の覚え方を教えてくれた先輩の一言が、結果「絶対音感」を身に着けることになった。点字の覚えの遅かった自分を励まし、むしろ皆の前での本読みを課した先生。そんな小さなきっかけが「自分は人の前で声を出して何かをなすことが好きなのだ」ということを発見させてくれ、放送委員として活躍したり、ひいては歌を歌うことが自分のアイデンティティであることを確信させてくれたとのこと。

人生を振り返り、お金を遺す人、名声を遺す人、それは大事なことですが一番素晴らしいのは人を遺すこと、つまり「あの人に出逢って本当に良かった」と多くの人から慕われる日々を送ること、そして「出逢い」とは互いの人生に大きく良い影響を及ぼす「言葉」を与え合うことだと新垣さんは考えます。

新垣さんにとって「生きる」とは「工事中」、つまり、これで完成ということのない、絶えず前に向かっての終わりなき歩み、ナンバーワンでなくていい、自分に与えられたオンリーワンの良いところを発見し、それを人のために役立て続けることだといいます。たくさんの旋律が重なり合って音楽全体のハーモニーを奏できるように、人もそれぞれの役割を果たしながら人生と世の中の調和をかたち作ってゆくことが大切、と第1部を締め括りました。

第2部、リサイタルステージで披露された「カーロ・ミオ・ベン」は世界的ボイストレーナー、A・バランドーニ師のオーディションで歌った運命的な曲。日本人にはないラテン的な声を不思議に思った師の問いに、新垣さんは生き別れとなった沖縄駐留米兵の父の話をしました。バランドーニ師から「その声は神様とお父さんからのプレゼント。その声で一人でも多くの人を慰めるために歌い続けなさい。」と言われ、メキシコ系アメリカ人の血、沖縄の血、二つがもたらした明るく情熱的な自分の声に感謝しなくてはいけない、そう思い始め、自分の出自についての長年のわだかまりが吹っ切れ、またプロ歌手として生きていく決意を固めたのでした。

この他、平和と沖縄を愛してやまない作曲家寺島尚彦さんの「さとうきび畑」「緑陰（こかげ）」「ひとつだけの命」、新垣さんのライフワークとなりつつある東日本大震災復興応援歌「青い海よ」「雨ニモ負ケズ」など全16曲が披露され、沖縄独特の指笛交じるアンコールに応えた「アメイジング・グレース」をもって閉幕、会場はいつまでも感動に包まれていました。

